4. 地区ごとの現状と課題

（1）本丸地区

本丸地区には、石垣や雁木、歴史的建造物など、現存する徳川期の城郭遺構とともに、豊臣期～徳川期の地下遺構が多く残る。これらのなかには、天守台や山里丸などの曲輪石垣、櫓台石垣、豊臣期の詰ノ丸石垣、徳川期の本丸御殿といった大坂城にとってきわめて重要な遺構が多く含まれる。また、大阪城天守閣、旧第四師団司令部庁舎、配水池、旧紀州御殿付属庭園などといった近代以降の歴史資産、昭和初期から戦後復興期を経て現在まで続く都市公園としての整備の歩みを示す痕跡が多く残る地区でもあり、歴史が特に重層しているため、整備にあたっては慎重な検討が必要である。

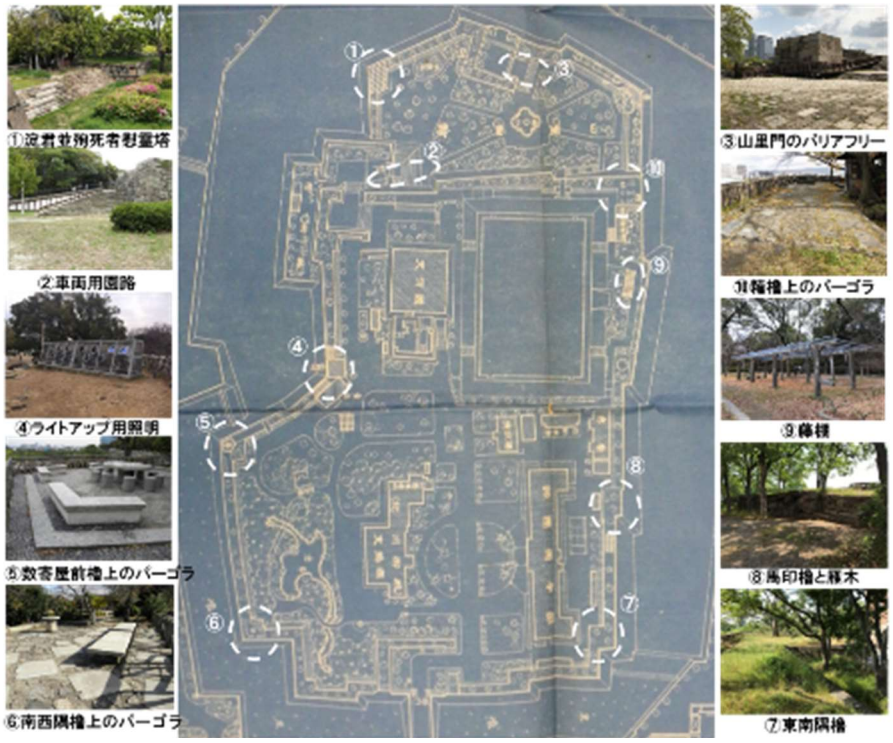

図 62　昭和 6 年の公園図と現状

図 63　本丸地区の現状（平成 31 年（2019）3 月時点）

（2）内堀地区

内堀地区は、本丸地区と二の丸地区を画する地区で、石垣に囲まれた水堀が中心だが、本丸南から南西にかけては空堀になっている。

堀の形状、周囲の造成地形に大きな改変はみられない。ただし内堀石垣の一部でもあった堀外側石垣南東の角部、極楽橋北詰東部にあった東仕切石垣は、近代以降に撤去されている。

近代以降の歴史資産に、東内堀（空堀）に残る防空壕の出入口、西内堀に架かる明治時代の配水管がある。

内堀地区は、来訪者が直接立入りできる場所ではないため、高石垣の視点場の明示や、現存する防空壕や失われた櫓の周知などが課題である。内堀を形成する石垣の修復に関して緊急性はないが、経過観察が必要である。また空堀内の除草や水堀の清掃などが常に必要である。

図 64　内堀地区の現状

（3）二の丸南地区

城郭の玄関口にあたる地区である。重要文化財が６棟、その他の歴史的建造物も複数遺存する。造成地形について大きな改変はない。現存する石垣は二の丸外郭を構成する石垣、門石垣、仕切石垣などで、南外堀に面する石垣は、大坂城跡を代表する屈曲の多い高石垣である。かつて東仕切、南仕切によって地区内が区切られていたが、東仕切は門跡から西の石積の全てが撤

図 65　二の丸南地区の現状

去、玉造口枡形石垣も大半が撤去改変され、付近の縄張が明瞭でなくなっている。雁木や石垣の消失・埋没箇所も多い。

大手口枡形の南東には西大番頭小屋、その東には東西大番衆小屋、一番櫓の西には東大番頭小屋、玉造門北西一帯には玉造口定番上屋敷があり、外堀に面する石垣沿いに一番から七番までの櫓とこれを繋ぐ塀が建っていたが、現存するのは一番櫓と六番櫓のみである。

図 66　豊国神社「秀石庭」

近代以降の歴史資産として、旧兵器支廠の門と塀が遺存している。

その他、ここには豊国神社や修道館など比較的大規模な施設がある。

南外堀の高石垣が大坂城跡を代表する見所であるため、石垣の計画的な修復や伸びすぎた樹木などへの対処を随時行い、城郭遺構への視認性を確保することが必要である。豊国神社は民有地であり、公園区域外であることから、一体管理が難しい。敷地内には重森三玲作庭の「秀石庭」がある。

（4）二の丸東地区

堀側石垣に大きな破損はみられないが、梅林南東奥には空襲によって大きく破壊された石垣が今も修復されずに残る箇所がある。階段が設けられ、南の玉造口に抜ける通路として利用されていたようだが、現在通行は禁止されており、夏は草木に覆われる。　造成地形の大半は維持されていると見られるものの、地区南西端の雁木坂（階段）は現在の園路（斜路）下に本来の坂が埋没していると考えられ、外縁部の武者走り等の小段状地形も明瞭でなくなっている。

梅林一帯には徳川期に塀で区画された青屋口・中小屋・雁木坂の各加番小屋が建ち、外堀に面した石垣上には塀が建っていたがいずれも現存しない。

昭和 49 年（1974）には寄贈木をもとに梅林が開設さ

図 67　二の丸東地区の現状

れ、現在約 90 種、約 1240 本のウメが咲き誇り、1 月から 3 月中旬にかけての開花期には多くの来訪者がある。

ウメの開花時期以外は、静かな樹林地となる。

（5）二の丸北地区

城郭の北の入口にあたる。西の京橋口と東の青屋口に枡形を配し、曲輪内部は東仕切、西仕切によって区切られていた。近代以降の改変により東仕切石垣はほぼ完全に撤去され、西仕切石垣は部分的に撤去されている。京橋口枡形、青屋口枡形の石垣は改変や空襲の影響を蒙りつつも残っている。それ以外の造成地形はおおむね現状維持されていると見られる。その他の石垣については、堀側石垣に孕みや抜けが目立ち、天端付近の、実生木が石垣のずれなどを起こしている箇所が多い。雁木は青屋門から西にかけて大半が埋没している。

徳川期には、曲輪内部に西から京橋口定番上屋敷、金奉行元屋敷、東には目付小屋などがあり、外堀に面して多聞櫓、塀などを巡らし、中央出隅に３重３階の伏見櫓、京橋口枡形には多聞櫓が建っていた。現在これらの建物はいずれも残っていない。

青屋門は昭和 44 年（1969）に残存材料を用いて復元されており、現在は文化財に準じた維持管理がなされている。

石垣・雁木の状態悪化を防ぐための経過観察及び実生木などの除去が必要である。また徳川期大坂城の京橋口定番上屋敷、金奉行元屋敷等の存在を周知していく必要がある。

（6）二の丸西地区

図 68　二の丸北地区の現状

図 69　二の丸西地区の現状

重要文化財に指定された歴史的建造物が３棟残り、公園内で唯一の有料区域である。植栽・植生はサクラ（ソメイヨシノ）が最も多く、サクラの開花期に実施される観桜ナイターや芝生広場を利用したイベントなど、季節行事や企画開催にともなう利用が多い。出入口は南側の一箇所のみである。二の丸地区内であることから、特別史跡の本質的価値である城郭の景観に配慮した利用が求められる。

当地区南半は大坂城代の上屋敷跡にあたり、その北は西の丸と呼ばれ、米・味噌などを備蓄する多数の蔵が建ち並び、北東には目付小屋があり、その北端は北仕切によって北側の地区と区切られていた。外堀に面して３つの隅櫓が建ち、塀がこれらをつないでいた。残っているのは千貫櫓、乾櫓、焔硝蔵のみで、いずれも重要文化財の指定を受け、適宜補修、修理が行われている。しかしながら耐震補強や計画修繕などが課題となっている。　造成地形に大きな改変等はないが、中央部内堀沿いにあった尾止坂（階段）は埋没していると見られる。石垣については、外周部の武者走りの内側石垣・雁木の一部が現状では確認できず、埋没・消失していると見られる。曲輪内では北仕切門跡周辺の積石の焼損・劣化が著しく、付近の雁木の欠損やずれも目立つ。

焼損が著しい北仕切門跡周辺の石垣の補強などを計画的に実施し、徳川期大坂城の遺構をさらに周知していく必要がある。

西の丸地区を特徴づけるサクラを引き続き良好に管理し、二の丸の回遊性を高めるため、出入口が一ケ所しかない現状を改善していくことが必要である。

（7）外堀地区

二の丸と外堀外縁地区を画する石垣に囲まれた水堀で、幅は約 70m～140mある。大坂城防衛の要で、南・西・北外堀はほぼ往時の姿を留める。青屋口から南にのびる東外堀は大阪砲兵工廠の敷地拡張に伴って大正年間に埋め立てられ、その後平成 6～ 9 年（1994～1997）に復元されたが、青屋口周辺及び南西端（公園未開設区域）の復元はなされなかった。そのため、大坂城唯一の出枡形構造を備える青屋口本来の形状を想像することがいまだに困難な状態にある。

図 70　外堀地区の現状

堀外側石垣は、天端の不陸、ずれ、積み石の落下等などが一部見られることから、経過観察を行い、必要に応じて修復を実施する。

地下遺構については、南外堀が干上がった時の調査で墨書のある自然石を中心とした石列が検出され、これは豊臣期大坂城の二の丸南面の堀石垣ではないかと推定されている。本丸以外にも豊臣期大坂城の遺構があることを周知していく必要がある。

図 71　外堀外縁南西地区の現状

（8）外堀外縁南西地区

大手口、玉造口のそれぞれ外側、及び南外堀の南にあたる地区である。駐車場やロータリー、入口広場などがある。本質的価値を構成する諸要素に大手口土橋、玉造口土橋及び外堀周縁部の造成平坦面がある。周辺平坦地は徳川期には明地（空地）であり、幕末をのぞき特別な施設は建っていなかった。

玉造口土橋は車両の進入路となっている。土橋の石垣の一部には、天端付近の実生木の樹根による石垣のずれなどが見られる。土橋上の通路両側の石列に一部緩みも見られる。

かつては大手口や、玉造土橋上に番所があった。土橋の緩い傾斜は、かつては雁木で、現在は舗装道路や芝生地となっている。

近代以降の歴史資産では大手口の北に配水場（昭和６年（1931）竣工）があり、南外堀南西に、記念碑として設置された教育塔（昭和11年（1936）建立）がある。

植栽・植生は、サクラ（ソメイヨシノなど）、クスノキが多くを占める。

当地区は南や西から城をのぞむ絶好の場所であり、外堀を巡る園路沿いにはサクラ並木もあるため、景観と植栽の管理をバランスよく行う必要がある。

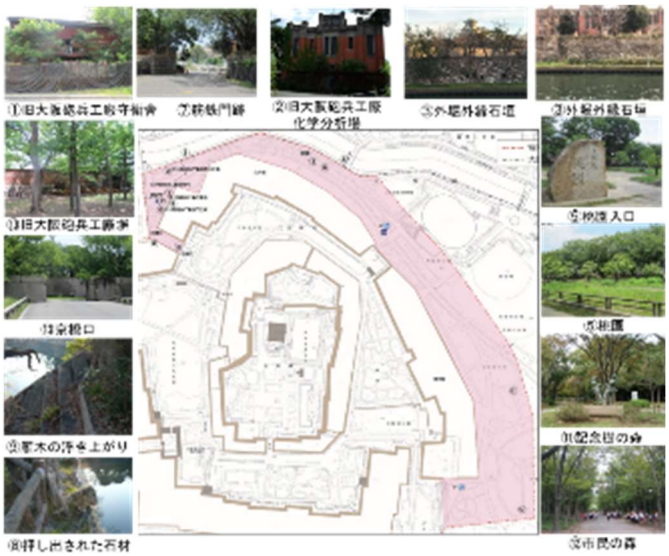

図 72　外堀外縁北東地区の現状

（9）外堀外縁北東地区

二の丸の外側、北から東にかけての地区で、外堀東側の記念樹の森との一体的利用

がはかられている。現存遺構としては、北外曲輪（三の丸）入口の筋鉄門から大川・第二寝屋川沿いの北外曲輪外郭石垣と京橋口土橋がある。

筋鉄門周辺は、旧大阪砲兵工廠表門付近を整備する際に改変を受け、その後空襲によって被災し、現在では石垣の焼損が著しい。外堀周縁の造成平坦面は徳川期には幕末をのぞいて大半が明地（空地）だったが、北外曲輪（三の丸）の内の今の太陽の広場付近は御蔵曲輪とよばれ、幕府の蔵が立ち並んでいた。新鳴野橋の南、北外曲輪を東西に分けていた仕切石垣は完全に消滅している。地区南東部の算用曲輪は杉山とも呼ばれ、徳川期にはスギが林立する小山で行楽地でもあった。京橋口土橋上には番所があったが現存しない。

近代以降の歴史的価値を構成する要素としては、旧大阪砲兵工廠関連として表門付近の塀（筋鉄門両側の石垣上に築造）、化学分析場、守衛舎、鉱滓（遺物）がある。

植栽は、外堀東側の記念樹の森などを中心としてクスノキ、ケヤキなどが多くを占める。外堀周縁部はサクラ並木となっている。

北外曲輪（三の丸）外郭の石垣など徳川期大坂城の本質的価値に関わる遺構の周知が必要である。焼損著しい筋鉄門周辺の石垣は、経過観察を行いながら必要に応じて修復を実施する。公園区域外にある旧化学分析場及びその周辺一帯の活用について検討を進める必要がある。

森ノ宮噴水周辺から、記念樹の森のある東外堀や玉造口に至る動線上の見どころを開発し周知をはかることが望ましい。

（10）公園地区

特別史跡指定地外の大阪城公園地区である。外堀外縁北東地区から連続する北外曲輪を構成する石垣が第二寝屋川沿いに残る。北部は城郭の一部である御蔵曲輪にあたり、徳川期には蔵が多く建ち並んでいた。玉造口周辺では、豊臣期大坂城の玉造口馬出曲輪の一部と見られる堀、石垣遺構などが確認された。

近代以降の歴史的価値を構成する諸要素として、旧大阪砲兵工廠の水門が残存する。

図 73　公園地区の現状

植栽・植生は、千本を超えるケヤキとクスノキをはじめ、イチョウ、アラカシ、カイヅカイブキ、ウバメガシ、アキニレ、シラカシなど多くの公園樹がある。

またこの地区には、音楽堂、クールジャパンパーク大阪などの教養施設、大阪城ホール、野球場、弓道場などの運動施設、ジョー・テラス・オオサカなどの便益施設、また、水上バス大阪城港や公共船着場などの管理施設がある。船着場（水上バス大阪城港及び公共船着場）は利用者にとって必要な交通インフラであることから引き続き維持活用をはかり、エントランスを含めた周辺一帯の管理については、大阪城の歴史的景観との調和をはかりつつ進められるよう関係者へ求めていく。

図 74　弓道場

図 75　クールジャパンパーク大阪

城の外郭であり築城時の石垣が一部残されているほか、豊臣期の遺構も一部確認されており、近代の遺産も残存しているが、いずれも十分に知られていないため、これらの周知が課題である。全体として豊かな森林を特徴とする地区であるが、巨大化して見通しや安全性を阻害する樹木もあることから、危険木については速やかに撤去するなどの処置が必要である。